

復刻 菊池寛将棋関連文章

西井弥生子

〔凡例〕

- ・旧字は新字に適宜改めた。
- ・『菊池寛全集』全二四卷（高松市菊池寛記念館）および『菊池寛全集』補巻一～五卷（武蔵野書房）未収録文章を發表年代順に収めた。
- ・他に、八段土居市太郎、八段木村義雄、六段萩原淳、佐佐木茂索、十一谷義三郎、近藤経一、菊池寛「銷夏座談会 将棋」『文藝春秋』一九二八・八、一六九～一七九頁、「菊池寛の対局譜／昭和六年一月 於 文藝春秋倶楽部」（越智信義『将棋の博物誌』一九九五・一〇・三一、三二書房、二六二頁 ※萩原淳との対局譜）、「文豪、将棋を語る 菊池寛氏、木村名人、金子八段鼎談」（『将棋世界』一九四〇・一二、三～一〇頁）、「玄人と素人熱戦譜」（『将棋世界』一九四一・六、三～一〇頁）があるが、対象外とした。

菊池寛氏談「金子氏の成績、全く驚異」（『読売新聞』朝刊、一九二九・一〇・二九、二面）

金子七段が棋界の逸材であり、その棋風名人の風格ありといふことは予て承知してゐたが、今回の如く八段を三人までも連続薙ぎ倒さうとは、八段同志の間においても前例のないことで、全く驚異の成績である。木村八段との対局はさぞ見物だらう、自分は是非見て書いてみたいと思ふ

菊池「昇段規定無しの手合」（『将棋』『文藝春秋』

一九三四・一二、一三一頁）

萩原七段が、僕の所へ来て、（今年は成績がい、から八段になれるかも知れん）と、欣んでゐたが十月になつて急に、（今年は規定が變つて二年制になつたから、どんなに成績がよくつてもなれん）と云つてしよげてゐた。（そんなら、今年の規定はいつ定まつたんだ？）と云つて訊いたら、（今年の初から、秋になつたら變へると云ふ話であつた）と云ふ。ぢやつまり去年の規定は、今年の初で効力を無くしてゐたわけである。それで見ると、将棋連盟の人達は、今年の初から十月の初まで、昇段規定なしに、将棋を指してゐたわけである。もし、九月まで去年の規定が効力あるものならば、萩原の成績は、その規定の適用を受けてもい、ものだからである。萩原の九月までの成績

が、十月三日制定の規約の適用を受けると云ふことになれば、日本の棋士達は九ヶ月間は、昇段規定なしに将棋をさしてゐたわけである。昇段規定の定まつてゐない勝負を、新聞紙などでも、よく載せたし、我々も力こぶを入れて見てゐたものである。打者が、ヒットを飛ばした後で、二塁打にしようか三塁打にしようかと云つて、グラウンド・ルールを定めてゐるやうなものだ。日本の棋士など云ふものはのんきなのだか、馬鹿なのだから。 (菊池)

菊池寛「序」(菅谷北斗星、大崎熊雄『将棋の指し方』一九三五・九・二四、博文館、一〇二頁)

棋戦評論家としての菅谷北斗星君の名は、あまりにも有名である。自分は、菅谷君とは年来の棋友であつて、その清新卓抜な文章には、文学上の新著に対すると同様な嗜慾をそそられずにはゐられない。

また、大崎八段は、棋界の一偉才であつて、その果敢剛毅の棋風は、自分の推服してやまぬところである。

本書は、この両者の協力によつて成れるもの、後者が、実践上から得た豊富な経験を提供すれば、前者は、将棋研究の成果たる該博な知識を披瀝して余すところがない。将棋入門書としては、最も著者にその人を得たといふべきである。

将棋研究の書は多い。また定跡解説書の類も少くない。しかし、初学者のための解説書であつて、本書の如く定跡の研究に主力を注いだものはまだない。しかもその解説に当つては、型破りの簡単な方式で、一読直ちに将棋の妙諦に入るやうに書かれてゐる。読者は絶対安心して本書に頼つていい。

その他、凡そ将棋について知りたいと思ふ知識は、悉く収めてこの一巻の中にある。敢て初学者といはず、凡そ棋力の上達を望む者にとつて、師友となり、参考となるところが少なくないと思ふ。棋界のため、この良著が博く普及されんことを願つてやまない。

昭和十年九月

菊池寛

菊池寛「人生は将棋なり」(『キング大娯楽園』『キング』一九三六・四、二六八頁)

人生は一局の棋なり。
一番勝負なり。
指し直すこと能はず。

菊池寛「続々将棋哲学」(『将棋世界』一九三八・一、九〇―一二頁)

将棋と心理作用

将棋の勝敗は、各人の強弱に依ること勿論であるが、然しそればかりではない。非常に微妙な心理の影響がある。技倆が優れて居ながら負けた例は幾何でもある。

宝暦六年の頃である。仙台の人保原嘉茂左衛門と云ふ青年が、将棋の天才として、修業のために江戸へ出て来た。少年氣を負ふて、眼中名人上手なき概があつた。彼は修業のために、幕府の将棋所伊藤家に入門を願つた。初めての手合に彼の相手をしたのは、八段伊藤看寿であつた。鬼宗看の異名を取つた兄の九段宗看と、伯仲の腕があると云はれた名手である。保原は心中五段の実力があると確信して居た。然るに、愈々対局となると、看寿は、入門者に対する伊藤家の定法であると称して、飛角を引いた上に両香を落したのである、所謂四枚落である。心中五段の力ありと確信して居た保原は、心の裡で激怒した。せめて二枚落なれば兎も角、四枚落とは何事ぞと思つた。いで、その儀ならば粉微塵にして呉れると、血眼になつて立ち向つた。が、焦つたのは彼の不覚であつた。看寿八段の応戦は、絶妙を極めて居た。それに反して焦りに焦つた彼は、平生の自信も、何処へやら、ザリ／＼と攻め寄せられて、無残にも一敗地に塗れたのである。そのために、若き天才保原は慚愧噴悶の餘り、一生

盤面に向はなかつたとの事である。が、看寿は四枚落で相手を破つたものの、相手の実力を認め、後に三段の免状を送つたとの事である。

その他、将棋界古今無双の名手と云はる、天野宗歩も、八段に出世すべき晴のお城将棋に、強敵大橋宗珉に敗れて居るのである。天野宗歩は、名人にも香を引いて対し得ただらうと云はれるほどで、十一段とも云ふべき神力を供へた名手であつたが、晴の場所につい気怯れがして、平生の技倆が出なかつたと云はれて居る。

将棋と慢心

又、慢心のために敗れた例もある。雁木流の元祖檜垣是安は、名人鬼宗看の右香落を破り、得意の餘り、凡そ天下に予に角落を勝つべき人はあらじと、豪語した。然るに超えて数日、同じ宗看の角落に向ひ、無残にも破れた、め、彼は憂憤の餘り、吐血して死んだと伝へられてゐる。

将棋と気持

将棋は、可なり気持の問題であるから、自分より上手だと怯ぢてかゝると、手も足も出ない。それに反して、度胸よき下手は上手を実力以上苦しめ得るのである。名人小野五平、黒田清

綱の屋敷へ伺候す。座に先客あり、清綱来客に曰く

「此の老人は将棋が強いから一局試みて如何」

と。来客も興を催し、五平翁とは知らず平手にて立ち向つた。

然るに来客の鋒先鋭く、五平翁は四五段の人に對せし如く、苦辛して漸く勝ちたるに、清綱伯笑ひて曰く

「おい榎本よく指したな。これは小野五平だよ」

と。蓋し五稜廓の勇将は、将棋の達人と知らずして、その胆力に依つて、散々苦しめたのであつた。實力は、初段の遙か下であつたとの事である。

菊池寛「新名人に就いて」(『将棋世界』一九三八・三、九頁)

今度木村君に名人が譲られたことは、これまでと違つて、一番強い人に譲られたので、全八段の人達に、新しい希望と発奮をもたらしたのである。

昔の幕府時代には、大橋とか伊藤とか云ふ将棋の宗家を継がなければ、絶対に名人にはなれなかつた。天才天野宗歩でさへどうにもしようがなかつたのだ。

明治になつてからも、名人が一人あると、どんな強い人が出て、その人が死ぬか、自発的に退位でもしなければ、名人にはなれなかつたのである。

然るに、関根名人が、単に弟子の木村君だからと云ふのでは

なく、名人戦を認めて、實力戦を展開した上で、真に力のある人に譲つた事は、将棋道のためまことに歎ばしい事である。

これからも将棋道は、情実を排し、名人戦を飽くまで公明正大なものにして、ますく斯道のために發達させたいものである。

菊池寛「将棋の追憶」(『将棋世界』一九三八・四、九一〇頁)

私が、将棋を研究し出したのは京都の大学生時代だつた。

私は、少年時代から将棋を指してゐた。が本當に研究し出したのは綾部に勝ちたいためだつた。

私の中学時代の友人で綾部健太郎と云ふ男がゐた。その男が偶然京都の法科に来てゐた。彼は、中学時代割合仲のいゝ私とは遊び友達であつたが、私も京都の文科にゐて、久し振りに綾部と逢つて将棋を指した。

ところが、私の方が頗る不利である。私は、定跡の本を買つて来ていろく調べた。それから出町橋の東詰の佐野春松と言ふ床屋の主人に教へて貰つた。そして間もなく綾部に勝つことが出来るやうになつた。

以来東京で二枚落で、綾部と指したが、二枚落では私の方が非常に楽であるところを見ると、恐らく四枚落位だらう。その時以來つまり、大駒四枚は進歩したのであらう。

私は、この床屋へは二年近く将棋を、指しに行つた。主人はでぶく／＼肥つた好人物であつた。お客の来ないスキを見ては、よく私とさしてくれた。二枚から一枚まで進んだ。恐らく初段近くの力がある人だらうと思ふ。

隣の車屋さんもなか／＼強かつた。米屋の若い衆にも、可なり強い男がゐた。私は、一枚落でさんざん負かされた。あまりに、くやしかつた敗局の盤面は今でも思ひ出す位である。

私は、大分前、と云つても十数年になるが、この床屋を久し振りに訪問し、主人の好きな酒を贈つた。その後一二度訪ねて行つた。私の小説の「将棋の師」や「歓待」は、その当時の書いたものである。

私は、将棋に熱中してゐた頃は、旅行すると必ず行先々の有段者を訪ねて行つては、さして貰つた。私は、大阪の木見八段や坂田名人も訪ねたことがある。

名古屋で盲人棋士の時田六段と指した時は、油断をしてゐたので最初の一歩は負けた。

相手を見くびつたり、油断をしたりすることは将棋では禁物である。

菊池寛「坂田氏の名人戦参加に就て」(『将棋世界』一九三八・七、九頁)

関西名人坂田三吉氏が名人戦に参加することになつたことは、既に発表されたから、読者諸君の中には知つてゐる人もあると思ふ。

坂田氏が、僕の勧誘に応じて名人戦に参加したことは、棋界近來の壮挙である。坂田氏を入れない名人戦は、何と云つても完璧とは云へないと思ふ。坂田氏は、関根名人とは同等の棋位を持つてゐたと云つてもよいので、他年関東の将棋界に対し一敵国であつたのだ。従つて過去に於て、たしかに名人を名乗つてもよい時代があつたのである。たゞ名人位に対する王道が開かれてゐなかつた、め、強引に名人を名乗つたため孤立になつたが、孤立のまゝで晩年を終らせることは坂田氏のためにも、日本将棋界のためにも遺憾であると思ふ。今度この人が従來の行きがかりを一擲して名人戦に参加することは、日本棋界のためにも、坂田氏のためにも、名人戦のためにも慶賀すべきことである。

六十九歳の老齡に拘らず頗る元気だが、何と云つても多年盤面から遠ざかつてゐたことは大きな不利である。最初の二、三局はそのため不振かも知れないが、やがて坂田氏本来の面目を発揮するだらうから、新聞将棋の焦点となることも遅くはないであらう。

菊池寛「僕と坂田三吉氏／晩年を飾る気魄の花」（『東京日日新聞』夕刊、一九三八・七・一九、八面）

坂田三吉氏が、突然僕を訪ねて来たのは今年二月の初めであつた。将棋を指したいから尽力してくれといふのであつた。いろいろな行きがかりで将棋が指せなくなつてゐる坂田氏が、将棋を指したいといふのは切実にして神聖なる希望だ。僕は、坂田氏のために、心から尽力しようと思つた。しかし僕の立場として、坂田氏に将棋を指させる場所は、名人戦よりないのである。が、過去において強引ではあるが、名人を名乗つた坂田氏が、今更名人戦に参加することは、相当の苦痛であつたに違ひない。しかし、僕はこれ以外に、坂田氏を生かし切る道はないと信じて坂田氏を説いた。坂田氏も、大死一番、遂に名人戦参加を決心した。たゞ、将棋を指したさの一心からだ。その一心あつてこそ、関西名人の名に背かないと思ふ。この一心は、坂田氏の晩年を飾る気魄の花だ。この一心があれば、名人戦に全敗しても、坂田三吉の名は棋史に輝くと思つた。たゞ、去年木村、花田に連敗してゐるために「坂田弱し」の下馬評が盛んな事だ。下馬評などは極端から極端に走るものだ。往年の坂田が、そんなに弱くなる筈はないのだ。たゞ、盤面に遠ざかつてゐたのと、負けじ魂から、つい奇手を弄し過ぎたための不覚なのだ。今度の対神田戦でも、勝つてゐた将棋を、あせつた、めに惜敗した。

今二、三局指して落着きが出来たら必ずや坂田本来の面目を発揮して、坂田弱しの下馬評を粉碎するだらうと思つてゐる。花田八段が棋士の年齢は問題でない。気魄の問題だといつてゐたが、坂田氏はその烈々たる闘志において、壮年棋士の何人にも劣るものではないと思つてゐる。彼はきつと木村名人打倒の野心をその六十九歳の小軀に、燃やしてゐるのではないかと思ふ。

「木村土居七番戦予想」（『文藝春秋』一九四〇・六、七九頁）

—葉書回答—

- 一、いづれに勝たせたいか
- 一、いづれが勝つと思ふか
- 一、右の理由あるひは寸感

○菊池寛

一、別にどちらに勝たせたいとも思はないが、次の名人戦が面白くなるといふ点では、土居氏に勝たせたい。

一、本命といふ意味で木村氏。

一、木村氏の方が研究してゐるのではないか。

究極へ来ると木村氏の「研究」と土居氏との「かん」との戦ひになると思ふのだが、結局木村の「研究」が土居の「かん」に勝つのではないか。

菊池寛「時代の相違 環境の差が土居の不運」(『東京日日新聞』夕刊、一九四〇・八・四、四面)

5の二

私のやうな素人から考へると、木村名人と土居八段のかうした棋力の差違は、その各自の天稟の棋才の相違だとは思へない。恐らく、性格と修業から来た差違であらう。木村名人は、その一生を通じて、如何なる一局をも、全力をもつて戦つて来た人である。奨励会の少年から聴いた話であるが、大駒落を指す場合なども、獅子の子虫を搏つ如く、全精神を傾倒し盤面においては、何らの容赦もなく辛辣を極め、敗勢の場合にも、最善の手段を尽して、負けてもケレンやゴマカシなどは絶対にやらないとのことである。一生を通じて、かうした対局態度に終始し、その類稀な叡智をもつて、将棋を研究した木村名人が、棋士として最高の最深の将棋理論を味得してゐることは、当然などであらう。

これに比べると、土居八段は、木村名人に比して、大先輩ではあるが、ずっと苦勞が少かつたのではないか。弱冠にして、豊富な棋才に恵まれた土居さんは、関根名人に発見されて、上京して見れば、蓑、川井、勝浦などの先輩は、大したこともなく、井上八段坂田八段などの強敵とは、指す機会に恵まれず、花田、大崎などはなほ未だ台頭せず、苦手も強敵もない土居八

段は、その才分を適度に發揮すれば、面白可笑しく連勝し得たのではあるまいか、土井八段の青年時代は、苦練修行といふ点では、怖しく恵まれてゐないのではあるまいか。土居八段に比べれば、木村名人は、あまりに多くの強い同輩と先輩とに恵まれてゐたのである。一局一局の勝利が、努力奮闘の賜物であつたのである。

菊池寛「土居の闘志。打倒木村。不可能でない」(『東京日日新聞』夕刊、一九四〇・八・六、四面)

5の三

一生を通じて、血みどろの血戦に終始して来た木村名人と、その境遇と、その楽天的な性格とで、悠々として将棋道を進んで来た土居八段とは、その棋才的天分は同一であつたとしても、その苦練修業から獲得したものに、何らかの差違が生じてゐるのではあるまいか。木村名人が、名人戦の評に(土居さんが、一局毎に強くなるのには弱つた)と、いつてゐる。五十四歳の老棋士が今更強くなるわけもないと思はれるが、今度初めて土居八段が丹心を籠めた将棋を指したといふ意味にとつていゝのではあるまいか。そして、そのやうな対局精神で、今五六局も戦へば、打倒木村が必ずしも不可能ではないといふ確信を、土居八段は掴んだのではあるまいか。土居八段の「もう一度挑戦

者になりたい」といふ感想には、しみぐと自信と希望とが感ぜられた。

八段戦の優勝者である土居八段には、是非とも准名人を贈つたらどうか。また名人戦の始まる前に、もし木村名人が敗退した場合の処置をも考へて置くべきであつたのだ。名人をすぐ八段に降下するなどといふことは、人情的にも出来ないし、実際問題としても不都合である。名人が敗退した場合は、やはり准名人といふ称号を贈つて、特別扱ひをすべきである。准名人に対しては、八段戦参加の場合にも、ある特点を認むべきか、認むべきでないか、これはちよつと難かしい問題である。

菊池寛「僕の将棋生活」(『将棋世界』一九四一・三、二―三頁)

僕が、最初将棋の趣味を養はれたのは、「萬朝報」のためであらう。僕は、中学生時代から「萬朝報」の愛読者であつたが、「萬朝報」は、新聞として一番早く指将棋を掲載した新聞で、明治四十年前後から載つてゐたと思ふ。

その頃、土居八段が、二段か三段かではなかつたかと思ふ。金さんもすぐ現はれたやうに思ふ。平手戦は、樽囲ひが全盛であつた。

僕が初て専門棋士の手合を見たのは、大正七年頃で、土居対坂田の一戦であつた。そのとき、坂田氏が関根さんを目当てに

挑戦して来たのを、関根さんが、先づ弟子の土居さんを、急遽八段に昇段させて、対局させた時で、その対局は相当センセイションを起したものだつた。場所は、たしか日本倶楽部で、僕は当時、時事新報の記者で、将棋好きと云ふので、社命で見物を命ぜられたのだが、柳澤泊や大橋新太郎なども見に来てゐた。土居さんが敵の陣中に角を打ち込んで勝つたのだが、その角打は、たゞ成り返ることが出来る丈で、素人眼には、どうかと思はれるやうな角打だつた。

その頃、日比谷の交叉点近くに居た小野名人を、やはり新聞記者として訪ねて行つた事がある。現在の味のデパートの所に在つたゴミ／＼して路次裏に居られたやうに思ふ。

その頃、死んだ大崎八段が、将棋を時事新報に新しく掲載をする交渉のために、時事新報へ来たことを覚えてゐる。たしか、佐藤と云ふ人と一しよであつた。この佐藤と云ふ人は、国民の将棋欄を担当してゐた人で、将棋を新聞紙に持ち込むことに、相当功績のあつた人であるらしい。

その頃、僕は湯島天神下にあつた館花浪路と云ふ老人が開いてゐた将棋会所へ、毎夜のやうに通つてゐたが、其処で大阪から上京したばかり、少年棋士に会つた。それが、現在の萩原八段で、たしか大正十年頃である。それ以来、萩原君は、僕のものに来てゐるわけである。その頃、土居さんの数寄屋橋の家へも、

二三度行つたことを記憶してゐる。そこで、花田さんと飛香落をさして貰つたことがある。

僕が、初段を貰つたのは、たしか大正十二年であるが、その頃現在の木村名人が、僕の雜司ヶ谷の家に稽古に来てゐた。それは、萩原君が震災後、大阪へ歸つてしまつた為である。木村名人は半年ばかり来てゐたやうに思ふ。平手で、稽古をして貰つてゐたが、一番も勝てなかつたが、その中一番丈、危く勝ちさうになつた事を記憶してゐる。

その頃、渡辺七段も、僕の家へ一、二度来たやうに思ふ。たしか二段だつたと思ふ。金さんも、一度来たことがあるやうに思ふ。その頃、金子氏が、神楽坂の近くに稽古所を開いてゐたが、やはり僕の家へ一二度来たやうに思ふ。

その頃の方が、僕は今よりも、盛んに将棋生活をやつてゐたわけで、大阪へ行つたときなど、わざわざ木見氏を訪問して、指して貰つたり、また御苦労千万にも、吹田まで行つて坂田氏を訪ねたことさへある。その時、坂田氏は不在であつた、一昨年だつたが、坂田氏は将棋界に復活せんとして、僕を訪ねて来たが、そのときが坂田氏とは初対面であつた。

僕が、将棋に熱心であつたのは、昭和二、三年まで、その後は何となく、将棋に遠ざかり、一時は萩原君がやつて来る場合は、此方の方でおつき合をするやうな風になつてゐた。従つ

て、将棋界との接触も少くなつたから、新八段などは、顔も知らない人もある位だ。しかし、最近では、萩原君の外、梶君が来るし、新進の松田四段、高柳二段なども時々来るので、将棋を指す機会が多くなつた。

無署名「菊池寛氏の投書」(『将棋世界』一九四一・一二、五一頁)

先月号の読者の棋譜の中、第三局の清水宮本両氏の棋力を、十級位と鑑定してありますが、十級とすれば大成会の初段の人と二枚落ですが、そんなに大成会の初段は、強いのでせうか。僕は、あの両氏は二枚では、絶対に初段には負けないと思ひます。僕が間違つて居れば、實際に対局を催して、僕の妄を啓いて貰ひたいと思ひます。

菊池寛「大波瀾を望む」(『第三期名人位挑戦試合／木村、神田戦の予想』『将棋世界』一九四二・七、八〇九頁)

神田八段が、今回の名人位挑戦者となつたことは、全国の将棋ファンの普く喝采するところだと思ふ。ぜひ、華々しき熱戦を演出して、最近の新聞紙の将棋冷遇の情勢を一掃して貰ひたいものである。

僕なんかの素人には、この最も期待された名人戦の予想などする資格はないが、将棋はとにかく、気魄と肚と技術の争ひで

ある。殊に、木村名人に向つて行くのには、（木村怖るゝに足らず）の気魄が、一番必要である東京の八段連中は、悉く木村恐怖病にかゝつてゐる。木村名人に対しては悉く音を上げてゐるやうな感じである。そこへ行くと、（木村怖るゝに足らず）と、豪語するばかりで、肚の中でもさう思つてゐるのは、神田八段だけだらう。

殊に、神田八段は、茲一番と云ふ勝負には強いやうである。昭和十年の対東京高段者戦にも、十勝四敗の好成績を上げ、しかも相手方の主力たる木村、土居、花田、金子などを薙ぎ倒してゐる。強敵に対した方が却つて力が出るやうな性格らしい。

名人とのこれまでの対局では、結局負け越しとの事であるが、しかし、八段中、最も好成績を上げてゐる。

最近八段連中に連勝した松田六段なども神田氏にかゝつては、一寸勝手が違つたやうである。

殊に、最近愛息を国家のために、さ、げた丈に、心胸的にも、一段の悟道には入つてゐる筈で、それが今度の名人戦にも、必ず何等かの形であらはれた。愛息の戦死の悲しみを、じつとこらへた心境は、棋道に対する大精進となつて、現はれて来るのではないだらうか。

しかし、何しろ相手の名人は、古今未曾有の棋士である。天野宗歩などよりも、研究精進の点では、はるかに勝つてゐるの

ではないか。盤面的叡智と超盤面的叡智とが渾然として調和した人である。気魄も肚も十二分に持ち合はせた人である。将棋戦術の上では、恐らく何人の追隨をも許さないであらう。

たゞ、攻めるものと守るものとは、攻める方が有利である。神田八段は、玉砕を期することが出来るが、名人はさうではない。ぜひとも勝たねばならぬ。受けて立つ横綱のなやみが、多少ともあるのではないか。

かうした大勝負に、神経や感情の影響を受けることは禁物だが、その点では名人も神田氏も充分信頼出来る人達である。恐らく、最も純理的な猛闘がつゞけられるのではないか。

専門の棋士達は、やはり名人有利を説く人が多い。しかし、神田八段が、一世一代の勝負に、火の玉となつて、ぶつつかつて行く所に、多大の興味がある。もし、最初の一局を名人が失つた場合は、七局全体の勝負は天下の将棋ファンを熱狂させるに足るだらう。

私は、新聞紙に於ける将棋の位置が、危機に瀕する現在、神田八段の健闘を望んでやまない。

と、云つて私は、神田八段びるきでもなければ、名人びるきでもない。私は、昭和の将棋道のために、一勝一敗虚々実々の大波乱を望んで止まないのである。

もし、神田八段が、手もなく敗退するやうなら、木村名人の

天下は、今後、三期四期は微動もしないのではないだろうか。恐らく、神田八段の挑戦は、木村名人の王座を、ゆり動かす唯一のチャンスであらう。

菊池寛「序」(加藤治郎『将棋は歩から』一九四九・三・一〇、唯人社)

加藤治郎氏は、棋士中の異彩である。加藤氏の棋風の裏には、教養と学問がある。

将棋学と云ふものが、存在するかどうかは疑問だが、将棋を科学的哲学的に解釈する点に於て、加藤氏は棋士中第一人者であるか知れない。

私は、加藤氏から数番将棋を教はつたが、その説明には、他の棋士からは聞かれないやうな創意と新鮮味があつた。

今度、加藤氏は歩を中心としての棋書を出版することになった。

歩についての研究は、加藤氏が十数年に亘つて、心血を注いだものである。歩は、将棋に於ける主食的位置にある。飛角は、有力であるが双方わづかに一枚である。その他の駒も双方わづかに二枚である。歩は、九枚である。

いかに、九枚の歩が棋戦の大勢を制するかは、何人も肯定する所である。一步の有無、損失は勝負を決するのである。歩の

重要性を知り、歩の使用法を知することは、将棋を知り、将棋の秘訣に達する王道であると云ふてもいいであらう。

敗戦後、凡ての物は栄枯盛衰が烈しい。将棋丈は、敗戦の惨苦にもめげず、再び隆盛に向はうとしてゐる。

この時に、この好著を得たのは、欣快の至りである。

昭和二十三年二月八日

菊池寛

菊池寛「序」(倉島竹二郎『将棋太平記』一九四九・五・一、日東出版社、一〇二頁)

倉島君は将棋の観戦記者として有名であるが、本来は三田出身の文学者である。小説の書ける人である。将棋の方は副業に過ぎないのである。倉島君が今度、本来の面目を発揮して「将棋太平記」を書いたことは、甚だ会心の事である。

天保、弘化、嘉永年間に於ける将棋界は、現代に劣らぬ位、華やかなものであつた。大橋、伊藤家元派の勢力が漸く衰へ、天野宗歩が野に在つて、天下に雄視してゐた。上野房次郎、のちの名人伊藤宗印が、家元派の勢力挽回を期して、ひそかに一剣を磨いてゐる。その上野房次郎を斃すべく、町人棋士市川太郎松が苦心惨憺してゐた。倉島君は、さうした事件を扱つて、いはゆる勝負の世界を描くことに成功してゐる。

剣を以てする勝負の世界は、すでに時代おくれだが、勝負事そのものは我々にとつて永久に一つのスリルである。聞くところによると、この小説が「夕刊みやこ」に連載中、非常な好評を博したさうであるが、やゝ動きに乏しい将棋の世界を描いて、最後まで読者を引張つて行つた倉島君の手腕は推奨するに値するであらう。自分は近來の力作だと思つてゐる。

〔駒澤大学非常勤講師〕